

2016年(平成28年)度 学校教育総合プランに沿った重点とする取り組みと評価

【 返子市立沼間中学校 】

学校教育総合プランの柱 ①	授業づくり		
	2016年(平成28年)度	2017年(平成29年)度	2018年(平成30年)度
学校及び学年等の実態	授業に取り組む姿勢はできているが、わからないことを意思表示できなかったり、難しいと感じたことには取り組めない生徒がいる。また、学習の定着は課題である。ここから、学びの目当て及び学習規律の明確化、また、意欲を持って学習に取り組ませるため、生徒主体の授業及び双方向的な授業への改善が必要である。	2. 3年生は学習の意欲はあるが、様々な発達特性により全体のスピードに併せて学習を進めることには困難がある生徒も多い。 1年生は小学校での丁寧な指導により学習を積み上げてきているが、複雑なことを理解させるには中学校でも段階を踏む必要がある。 職員に若手が増え、学校全体としても授業力の向上は喫緊の課題である。	
↓	↓	↓	↓
目標	授業研究の充実を図る	授業研究の充実を図る	
↓	↓	↓	↓
取り組み計画	①横浜国大及び国大附属鎌倉中学校及び沼間小学校・県立逗葉高校とも連携した校内研究を進める ②授業力の向上を目指す、生徒主体のinput-intake-outputを意識した授業づくり及び授業のユニバーサル化	①授業構成のユニバーサルデザイン化を校内研究課題をして設定し、すべての生徒が参加できる授業づくりに全教職員で取り組む。 ②授業構成のユニバーサルデザイン化について、講師を招き研修を行う。	
↓	↓	↓	↓
実践内容	①横浜国大米澤准教授を授業研究のスーパーバイザーにお願いして適切なアドバイスをいただくとともに、横浜国大鎌倉中学校の協力を仰ぎ、授業研究を進めた。 ②研究と関連させた公開授業を実施した。校内授業研究会では生徒主体のアクティブ・ラーニングの授業について研鑽を深めた。 年間指導計画に生徒主体の授業の実施を明記した。	①年2回、全教員が授業構成のユニバーサルデザイン化をテーマとした授業公開を行う。 ②授業のチェックシートで定期的(年4回を予定)に自己チェックを行いながら、授業改善に努める。 ③6月と12月に代表者による研究授業を行う。	
↓	↓	↓	↓
評価	B	A	
↓	↓	↓	↓
評価の根拠	・年間2回の研究授業を行うとともに、年間1回の授業公開により、全職員で生徒が主体的に学習し、思考し判断し表現するという授業について研修した。 ・横浜国大米澤先生や横浜国大附属鎌倉中の先生、近隣の逗葉高校、逗子高校の先生方の協力を得て研究会を進めることができた。 ・各教科で、生徒主体の授業の計画を年間計画に盛り込み、年間を通じて実施することができた。	・年2回の研究授業を行った。小学校、高等学校との研究協議を行うことができた。 ・全教員が「授業構成のユニバーサルデザイン化」を取り入れた授業公開を年2回行うことができた。 ・授業の自己チェックを定期的に行うことで、意識すべき項目が職員の中に浸透した。	
↓	↓	↓	↓
課題	・教員の年度途中での交替等もあって、一人2回以上の授業公開の機会を持つことが難しかった。 ・生徒主体の学びを単元の計画のどこに持ってくるのがより効果的かを探る必要がある。	・生徒全員が参加できる授業を構成する中で、グループ活動等を取り入れ生徒主体の場面を作り出すことはできてきたが、その学習での到達目標が教員自身の中で明確になっていないことが多く、学習が十分には深まっていない。 ・個別の声かけなど、一人一人の支援のニーズにあった対応を全教員ができるようになる必要がある。	

2016年(平成28年)度 学校教育総合プランに沿った取り組みと評価

【返子市立沼間中学校】

学校教育総合プランの柱 ② 集団づくり

2016年(平成28年)度

2017年(平成29年)度

2018年(平成30年)度

<p>学校及び学年等の実態</p>	<p>一小・一中の連続した人間関係の中で、優しく包まれている良さもあるが、居心地の悪さを感じながらもそれを表出できない生徒もいる。同年代に対する接し方を変える転換ポイントを把握できずに、いじめと捉えられてもおかしくない行動をとってしまいがちな生徒もいる。</p>	<p>一小・一中の連続した人間関係の中で、固定化した関係から抜け出たとしてもそれができず、自分を表出できずにいる生徒が少なからずいる。連続した関係の中で、同年代に対する接し方の転換ポイントを把握できずに不適切な言動をとってしまいがちな生徒もいる。教員集団は若手が増え、生徒に年齢的に近いことがプラスの面もあるが、問題となることの把握が十分にできないことも考えられる。</p>	
↓			
<p>目標</p>	<p>問題行動等への対応 積極的ないじめ・不登校等への未然防止と早期発見・早期対応に努める</p>	<p>問題行動等への対応 積極的ないじめ・不登校等への未然防止を行い、早期発見・早期対応に努める</p>	
↓			
<p>取り組み計画</p>	<p>①安心・安全な学級づくりに向けて、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング等の手法を導入する ②学級づくりの自己チェック表・解説を活用する ③本校の「いじめ防止基本方針」に基づき、問題行動の防止に向けた取り組みを実施する ④空き時間を利用した「Sの時間」を活用し、学級の見守りや、不登校生徒への個別対応を行う</p>	<p>①安心・安全な学級づくりに向けて、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング等の手法を導入する ②学級経営の自己チェックを定期的(年3回を予定)に行う 巡回SC等からの学級集団の状況のアセスメントを積極的に活用する ③本校の「いじめ防止基本方針」に基づき、問題行動の防止に向けた取り組みを実施する。生活アンケートを実施し、いじめ等の問題行動の早期発見に努める。 ④教員の「S時間」を活用し、学級の見守りや、不登校生徒への個別対応を行う</p>	
↓			
<p>実践内容</p>	<p>①各学年の実態に合わせて、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング等の手法を取り入れた学級活動等を行った。 ②学級づくりの自己チェック表で担任の取り組みを確認し、学級づくりに役立てた。 ③いじめに対する学校の方針を生徒・保護者に伝え、問題行動の防止に取り組んだ。生活アンケートを年2回実施し、早期発見・早期対応に努めた。 ④個別対応による、学級づくりへのサポートを行った。</p>	<p>①各学年の実態に合わせて、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング等の手法を取り入れた学級活動等を行う。 ②学級経営の自己チェックを定期的実施し、その分析を元に学級づくり、集団づくりの課題を全職員で共有する。 ③いじめに対する学校の方針を生徒・保護者に伝え、問題行動の防止に取り組む。生活アンケートを年2回実施する。生徒自身がいじめのない学校づくりについて考える。 ④問題が発生した場合には個別の対応を含め、迅速に解決に当たる。</p>	
↓			
<p>評価</p>	<p style="text-align: center;">A</p>	<p style="text-align: center;">A</p>	
<p>評価の根拠</p>	<p>・ソーシャルスキルトレーニング等を取り入れた活動で生徒の気持ちの成長を促すことができた。 ・年度当初の学級づくり研修の内容を自己チェック表で確認することができ、年間を通じて学級の状態に合わせた対応をすることができた。 ・生活アンケートにより、生徒の困り感を把握し、早期対応に結び付けることができた。</p>	<p>・学級活動の中で、コミュニケーション・スキルを高める活動やソーシャルスキルトレーニングを取り入れることができた。 ・年度当初には支援部主催で学級開きのための研修を持ち、学級づくり、集団づくりについての共通理解を図った。 ・学級経営の自己チェックを実施するとともに、節目毎に学級経営の研修をし、振り返りを行った。 ・落ち着いた学級集団が形成されている。 ・問題発生時には緊急対策会議を開き、組織的に解決にあたった。 ・学級復帰のための個別の対応等、一人一人に合わせた支援が行えた。</p>	
↓			
<p>課題</p>	<p>・生徒の様子を的確に把握できるよう、定期的に研修を持つ必要がある。 ・チェックリストを活用し、全体として取り組む重点を検討したい。</p>	<p>・欠席が続いている生徒へ、継続的な家庭訪問等の働きかけが必要である。 ・生徒の様子を的確に把握し、小さな変化を見逃さずに気付ける教員集団となるために、継続的な研修が必要である。 ・自己チェックリストの項目から重点を決めて取り組む。</p>	

2016年(平成28年)度 学校教育総合プランに沿った取り組みと評価

【返子市立沼間中学校】

学校教育総合プランの柱 ③ 学校組織づくり

2016年(平成28年)度

2017年(平成29年)度

2018年(平成30年)度

<p>学校及び学年等の実態</p>	<p>学校生活の中で、困り感を抱える生徒がどの学年にも複数存在している。また、自尊感情、自己肯定感が低い生徒も多い。</p>	<p>学校生活の中で、困り感を抱える生徒がどの学年にも複数存在している。また、自尊感情、自己肯定感が低い生徒も多い。</p>	
↓			
<p>目標</p>	<p>支援教育の推進 支援教育について、パーソナルアプローチとユニバーサルアプローチの二方面から取り組む</p>	<p>支援教育の推進 支援教育について、パーソナルアプローチ(支援シートの活用)とユニバーサルアプローチ(授業構成のユニバーサルデザイン化)の二方面から取り組む</p>	
↓			
<p>取り組み計画</p>	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの自尊感情を高め、プラスのストロークで子どもに接する(Treasure Student褒章制度の実施) 校内支援体制及び相談体制を強化し、家庭との連携を図って個々の生徒への支援を進める 授業のスタンダードを守り、授業のユニバーサル化に取り組む 年間2回の「目指す生徒像自己評価」を実施し、生徒に自らの力(コンピテンシー)がついたのか、振り返らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①子どもの自尊感情を高め、プラスのストロークで子どもに接する(Treasure Student褒章制度の実施) ②校内支援体制及び相談体制を強化し、家庭との連携を図って個々の生徒への支援を進める(支援シートの活用及び合理的配慮の研究) ③授業のスタンダードを守り、授業構成のユニバーサルデザイン化に取り組む 	
↓			
<p>実践内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ①個々の生徒へのアセスメント(見立て)を通して、特別な支援を必要とする生徒について具体的な支援プランを検討し、支援シートを作成した。 ②支援シートを作成した生徒を中心に、困り感を抱く生徒に対し、支援教室等を活用し個別の対応(支援プログラム)での支援を行った。 ③授業のスタンダードを学校全体で確認した。授業のユニバーサル化のポイントを職員で共有し、個々の授業でユニバーサル化を進めた。 ④Treasure Student褒章については、1月末時点で300名の生徒を表彰した。 ⑤「目指す生徒像自己評価」を年間2回実施し、1年前の自己評価に比して2・3年生は大きく評価を伸ばした。 	<ul style="list-style-type: none"> ①子どもの良い面を評価する意識を常に持つことを全職員で確認する。 ②個々の生徒及び保護者の困り感を、支援シート等を活用し個別の対応や合理的配慮等で解決できるよう支援する。 ③校内研究と合わせ、ユニバーサルな視点からは授業のスタンダードを全職員で徹底し、授業構成をユニバーサルデザイン化することで全生徒が落ち着いて授業に参加できる状況を作り出す。(授業についての自己チェックシートの活用) 	
↓			
<p>評価</p>	<p>A</p>	<p>A</p>	
<p>評価の根拠</p>	<ul style="list-style-type: none"> 支援シートを作成する中で、支援についての理解が深まった。 個別の対応について、取り組む中で、職員の理解が進み、全体での協力の体制が取れた。 困り感を持っている生徒を含めた学級全体への言葉かけなど、授業のユニバーサル化が進んだ。 生徒自身による肯定的な自己評価が2・3年生において、大きく伸びた。 	<ul style="list-style-type: none"> 沼中スタンダードを全体で確認しつつ、落ち着いた授業の雰囲気を作り出すことが概ねできた。 合理的配慮の具体的な要望はなかったが、授業構成のユニバーサルデザイン化がある程度できた授業では、困り感を感じている生徒も主体的に学習に参加することができた。 生徒の良い面を評価するTreasure Student褒章制度では、多くの生徒を励ますことができた。 	
↓			
<p>課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> 支援シートの作成についてさらに研修する必要がある。 授業のユニバーサル化を進めつつ、様々な状況の中でも強く生き抜く力を育成することを並行して行いたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 作成した支援シートを活用する。 授業構成のユニバーサルデザイン化が不十分なところを、全生徒が主体的に取り組める授業という視点を加えて更に研究する。 生徒に対する言葉かけを、前向きなプラスの表現にする意識を高める。 	